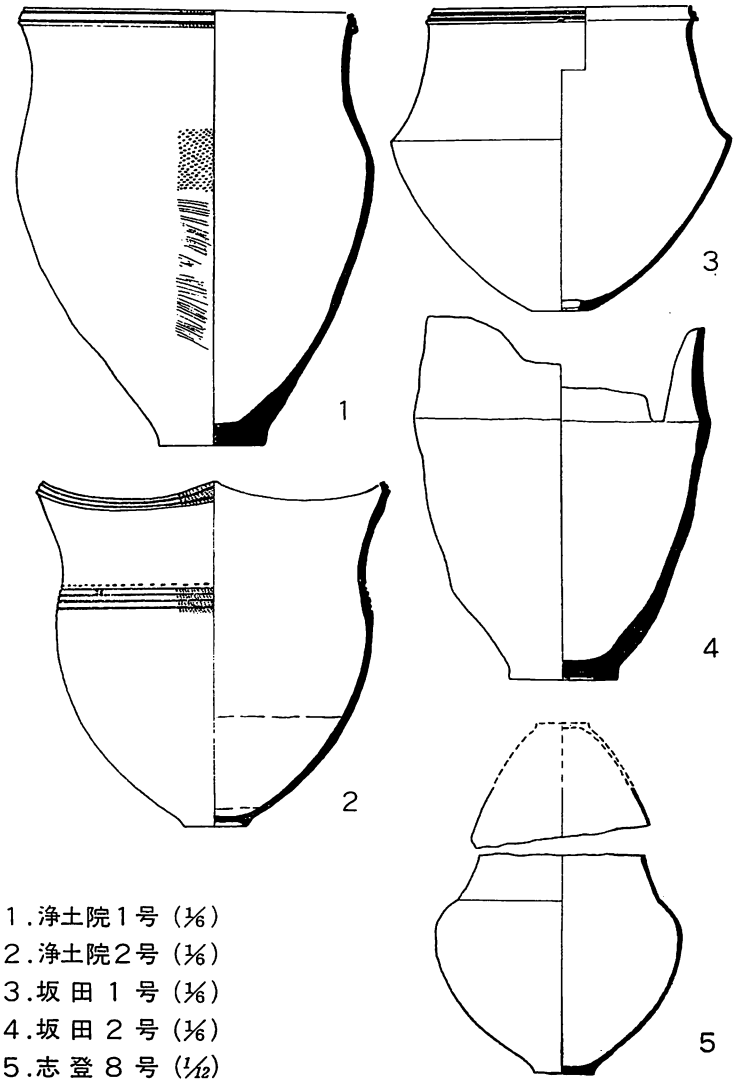
九州地方における縄文のカメ棺

― 福岡県の縄文時代カメ棺 ―

前　川　威　洋

福岡県における縄文時代後晩期の埋葬遺構（墓地）は多くなく、また各期にわたり連続してその葬法を知り得ない。県内においては後期中葉の山鹿貝塚で多くの埋葬人骨を発掘したが、そこで認められるのは単なる土壙墓だけであり、カメ棺墓やその他の埋葬方法はみられない。後期中葉以降は



1.浄土院1号（1/6）
2.浄土院2号（1/6）
3.坂田1号（1/6）
4.坂田2号（1/6）
5.志登8号（1/12）

第1図　各遺跡出土縄文時代カメ棺

ここにあげる甕棺墓が縄文時代の埋葬遺構として知られているだけで、支石墓や石棺、あるいは貝塚などにおける埋葬人骨の発見例もない。弥生時代初頭においては、春日市伯玄社遺跡、大野城市中・寺尾遺跡、朝倉郡夜須町沼尻遺跡、福岡市藤崎遺跡、行橋市長井遺跡などで、土壙墓、石棺墓がみつかっているが、まだカメ棺墓は知られていない。弥生時代の北部九州でさかんになるカメ棺、とくに成人用のカメ棺が出現し普及していくのは弥生時代前期後半からである。

各遺跡のカメ棺

1. 浄土院遺跡[1]　（京都郡苅田下片字藤田）

遺跡は高木山南麓で扇状地状の低い台地にある。昭和42年に小田富士雄氏らが調査にあたり、縄文後期の単棺1基を発掘したが、以前にも1基採集されているので、合計2基発見されたことになる。ここでは仮に調査前発見のものを1号カメ棺、調査時出土のものを2号カメ棺として記述したい。

1号カメ棺

調査以前に採集されたもので、この甕棺の口縁部は大半を欠失していて、直立ではなく斜位に埋置されていたようである。頸部はほぼ直立し、胴部はやゝ長目で、底部は厚手の平底である。くの字形に内折した口縁部に平行沈線文と磨消縄文を施文し、胴上部に縄文帯をめぐらしている。それ以下から底部までは条痕がつけられている。

2号カメ棺

カメの上面が表土下11cmという浅さのため、耕作により口縁の大部分は削り取られていた。カメ棺は直立していたのではなく、約30度ほど倒した状態で据え置かれて発見された。カメ棺内からは人骨片が出土し、そのなかには明らかに火葬骨と思われるものがみられた。カメ棺に使用された土器は、口縁部が4個所で山形になり、長めの頸と球形の胴部をもっている。くの字形に内折した口縁と肩部に縄文と平行沈線を施文している。頸部から肩へ移る部分には連点文を配し、肩部の平行沈線文のうち上二本間には「X」字状文を数個所施文している。底部は上げ底で穿孔はない。器面は内外面ともよく研磨され黒褐色を呈するが、底部近くでは褐色を呈している。1号カメ棺とともに縄文後期中葉の磨消縄文Ⅲ式（西平式）土器であるが、そのなかでも後出のものと思われる。

カメ棺内の人骨片は長崎大学医学部内藤芳篤教授の鑑定では火葬された成人女性のものとのことである。九州の縄文時代のカメ棺からは大分県禰宜野遺跡[2]の晩期の合わせ口カメ棺内より10才以上、20才以下の少年の臼歯がみつかり、能本県轟貝塚では縄文後期黒色磨研土器Ⅱ式(御領式)のカメ棺内に小児骨があった[3]。いずれも子供であり、成人骨は発見されていない。当カメ棺内から成人の火葬骨が出土したことは、洗骨葬とともに改葬の一新例として注目され、火葬自体もふくめて縄文時代後晩期の葬制の一部を知り得るとともにカメ棺葬の性格にも、多くの示唆をあたえるものとして重要であろう。

2. 坂田遺跡[4]　（山門郡瀬高町坂田字中園）

当遺跡は昭和32年に鏡山猛、久我愛策氏らによって調査され、晩期の単式カメ棺が2個発見された。遺跡は矢部川中流域の沖積平野に位置し、水田面からの比高1m前後の畑地である。地下げ工

事中に発見されたこれら2個の鉢形土器は、地表から口縁までの深さは約30㎝で、両者とも直立して埋置され、その間隔は5ｍほどであった。

1号カメ棺

肩がはった薄手の鉢形土器で、口縁は平縁でくの字形に内折し、その部分に二本の横線と押点を配している。器面は黄灰色を呈し、磨研の痕はなく、一部にわずかながら粗い条痕が残っている。また肩から下にはススが付着し、底面には穿孔がみられる。後期黒色磨研土器Ⅱ式に後続する晩期初頭の土器である。

なおこの1号カメ棺のすぐそばから完形注口土器が発見されているが、副葬品なのかどうかは不明である。

2号カメ棺

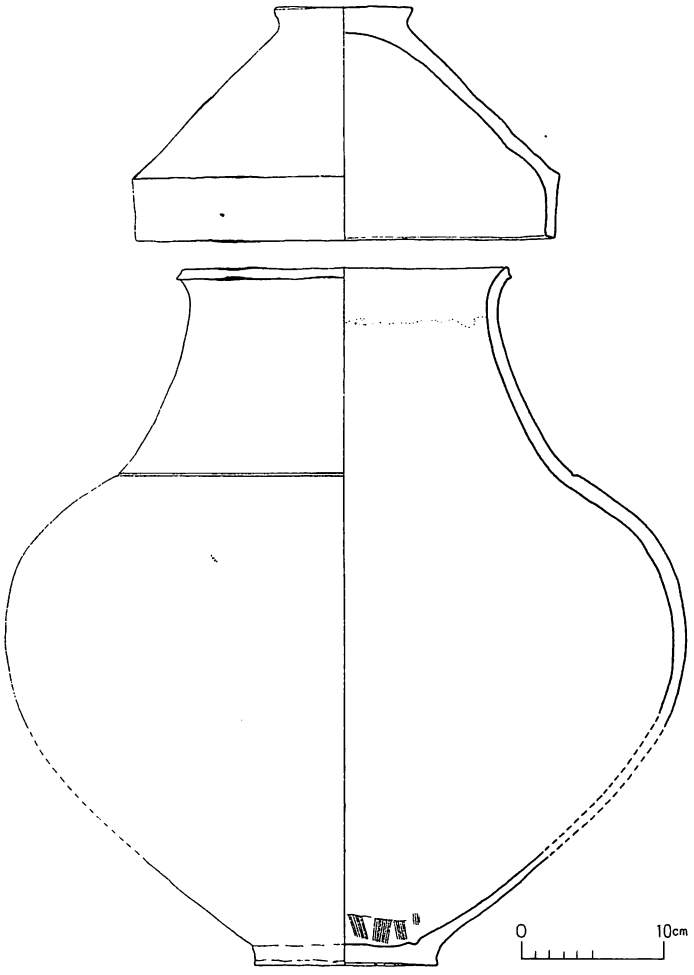
口縁が打ち欠かれているが、肩の張りが少なく、胴部下半では丸味をおびて底部へと続く、厚手の深鉢形土器で、器面は褐色を呈し粗い条痕が残っている。底部に穿孔はない。1号カメ棺とほぼ同時のものと考えられる。

3. 馬田上原遺跡[5]

甘木市馬田字上原にあり、昭和33年1月に台地地下げ工事にともない朝倉高等学校史学部により発掘調査が行なわれた。遺跡は弥生時代の墓地で、大小約30基のカメ棺、石蓋土壙がみつかり、そのほかに住居跡も確認されている。遺跡は筑後川の支流である小原川が甘木市街地の西側を通過するところから2㎞ほど下流の西岸で、水田面とは約5ｍほどの比高差がある台地の東北端に位置している。ここは旧太刀洗飛行場の西で、ふるくから弥生時代の遺跡として知られていて、当遺跡より500ｍ東の台地最端には、押型文土器を出土する縄文時代早期のひばりケ丘遺跡があり、小石原川を隔てて東3㎞の同様な台地上には貝輪、鉄戈、大形器台などの出土で知られる栗山カメ棺遺跡がある。

当遺跡出土カメ棺のほとんどは弥生中期のものであるが、それらの中に晩期黒色磨研Ⅲ式（夜臼式）の小形合わせカメ棺が一基出土している。カメ棺は鉢形土器と壺形土器を組み合わせたもので、地表下60㎝のところに、主軸をＮＥ64度の方向にとり、55度の傾斜で埋置されていた。なお蓋底部上に30×21㎝の雲母片岩の平板石が一枚のせられていた。

上カメに使用された土器は口径29.5㎝、高さ16.4㎝、底径9.6㎝の鉢形土器で、口縁はやや内傾し肩部で屈折し、下に開く底部へとつづいている。なおこの底部に籾の圧痕がついている。器面は内外面とも研磨されている。下カメは口径23㎝、高さ50㎝、胴最大径40～46㎝、底径14㎝の壺形土器で口縁部はやや開き、頸部と胴部とのさかいに沈線が一本あり、胴部が急にふくらんでいる。外面には全面にヘラ磨きされ、丹がぬられている。内面は口縁部に丹がぬられていて、他の部分は黄白色である。以上のことから、このカメ棺は縄文時代晩期Ⅲ式Ｃ土器の組み合わせと考えられる。



第２図　甘木市馬田上原遺跡出土甕棺

4.　志登支石墓群[6]　（糸島郡前原町大字志登字坂本）

昭和28年に志登支石墓群の調査が実施されたとき、支石墓やカメ棺群のなかに縄文晩期のカメ棺が１基発見されているが、とくに支石墓の主体部として埋置されたものではない。遺跡は糸島平野のほぼ中心に位置し、標高５～６ｍの沖積台地で、周囲の水田面よりおよそ１ｍほど高い場所にある。

縄文晩期の８号カメ棺は壺に鉢をかぶせたもので、ＳＥ23度の方向に、水平から26度の傾斜をもって埋置されていた。下カメは壺形土器で口縁は打ち欠かれている。頸部と胴部の接点に段があり、胴部は球形にふくらんでいる。器面には丹塗りヘラ磨きを施している。内面には縦方向に粗い刷毛目がつけられている。上カメである鉢形土器も口縁を打ち欠かれていて、底部はすでに消失していたが肩部は内側に折れ、晩期の鉢の特徴をあらわしている。表面はヘラ磨きを施し、内面もヘラで器面調整をしている。縄文晩期終末頃の土器と考えられる。

5. 石ケ崎遺跡[7] （糸島郡前原町大字曾根字石ケ崎）

昭和27年原田大六氏等が調査し、支石墓をふくむカメ棺群が発見されたが、そのうちの1基が縄文晩期のカメ棺であった。遺跡は志登支石墓の南方、北にのびる洪積台地の末端で、標高30cmである。

縄文晩期の6号カメ棺は下カメが壺、上カメが鉢の合わせ口カメ棺で、東南東の方向に、水平から30度の傾斜をもって埋められていた。下カメは胴部のふくらんだ壺形土器で、口径42cm、高さ45cmである。上カメは底部を欠くが口径39cmで肩部で屈折する浅鉢形土器で、口縁部の外側に厚味を少し加えている。上下甕合わせて全長約60cmを少しこえる程度である。縄文晩期終末の土器と考えられる。

これらのほかに糸島郡二丈町五久[8]でも晩期Ⅲ（夜臼式）の合わせ口カメ棺が発見されているが、詳細は不明である。

このようにみてくると福岡県の縄文時代のカメ棺は後期後半から出現し、晩期初頭までは数も少なくまた単カメのものだけである。晩期終末頃にはやや数も増え、また合わせ口カメ棺になってくる。カメ棺墓地の立地も、生活の場所とも関連があろうが、全般的に平野に面し、水田面より一段高い地形のところに多い。しかし縄文時代のカメ棺墓は散在的で数も少なく、当時の一般的な埋葬法と考えることは無理であろう。

なお各遺跡におけるカメ棺の説明および実測図はそれぞれの報告書から引用させていただいた。
また新原正典氏の助力を得て本稿が草されたことを感謝する。

(1) 浄土院遺跡調査団（1972）「浄土院遺跡調査概報」
(2) 鏡山猛（1972）「甕棺考」九州考古学論攷
(3) 隈昭志（1966）「縄文晩期と弥生前期との関係」考古学研究48
(4) 鏡山猛（1957）「筑後坂田の縄文土器」九州考古学2
(5) 福岡県立朝倉高等学校史学部（1969）「埋もれていた朝倉文化」
(6) 文化財保護委員会（1956）「志登支石墓群」
(7) 原田大六（1952）「福岡県石ケ崎の支石墓を含む原始墓地」
(8) 松尾禎作（1955）「佐賀県下の支石墓」佐賀県文化財調査報告書第四輯